多次元的道德性尺度の作成

石川泰地

(名城大学大学院総合学術研究科)

キーワード: 多次元的道德性, defining issues test, コールバーグの道德発達

Construction of Multidimensional Morality Scale

Taichi ISHIKAWA

(Environmental and Human Sciences, the graduate school of Meijo)

Key Words: multidimensionality of morality, defining issues test, Kohlberg's moral development

目 的

本邦における道德性の研究は、主に、山岸（1980）によって作成された日本語版 Defining Issues Test (DIT) が用いられてきた。しかしながら、櫻井（2011）が指摘するように DIT 以外の研究方法が必要であると考えられる。そこで本研究では、DIT とは異なる、新しい道德性の尺度を作成することを目的とする。

方 法

調査対象者

大学生 313 人を対象に質問紙調査を行い、欠損値があるものを除いた 274 (男性 147, 女性 127) 人を有効回答者とした。

質問紙の構成

フェイスシート 性別、年齢をたずね、その後、以下の尺度について、すべて 5 件法でたずねた。他に、Spranger の普遍的価値についてもたずねたが、ここでは扱っていない。

多次元的道德性尺度 大学生 31 (男性 11, 女性 20) 人に予備調査を行い、得られた自由記述結果を KJ 法(川喜田, 1967)により、整理・分類し作成された尺度である。自分自身について、質問項目がどの程度当てはまるかをたずねた。

社会化尺度 菊池（1988）による向社会的行動尺度の項目を用い、自分自身が質問項目をどう考えているかについてたずねた尺度である。

多次元共感性尺度 登張（2003）による尺度を用いた。4 つの下位尺度（“共感的関心”、“個人的苦痛”、“ファンタジー”、“気持ちの想像”）で構成されている。

根源的社会的ルール観尺度 広田（2010）による尺度を用いた。4 つの下位尺度（“自己対人関連”、“生命関連”、“メタルール関連”、“所有関連”）で構成されている。

自律性欲求尺度 安藤（2003）による尺度を用いた。2 つの下位尺度（“自己決定”、“独立”）で構成されている。

結 果

尺度構成

多次元的道德性尺度のうち、床効果のみられた“私は特定の宗教を信仰している。”を除く 30 項目について最尤法プロマックス回転による因子分析を行った。同一因子の項目を解釈した結果、第 1 因子は“人間性”（“私はあたたかい心を持っている。”など）、第 2 因子は“自律性”（“何があろうと私の信念は揺るがない。”など）、第 3 因子は“法の順守”（“私は法律で決められたことは守っている。”など）、第 4 因子は“共感性”（“私は他者の都合を考えない。”など）と命名した。尺度の内の一貫性を検討するため Cronbach の α 係数を算出した結果、人間性因子は. 79, 自律性因子は. 70, 法の順守因子は. 79, 共感性因子は. 70 と比較的高い信頼性が得られた。

多次元的道德性尺度の妥当性の検討

多次元的道德性尺度の下位尺度と、他の尺度との相関係数を算出し、妥当性の検討を行った。“人間性”は“共感的関心”(. 48)、“気持ちの想像”(. 42) と正の相関がみられた。“自

律性”は“自己決定”(. 64)、“独立”(. 50) と正の相関がみられ、“個人的苦痛”(-. 47) と負の相関がみられた。“法の順守”は“メタルール関連”(. 53) と正の相関がみられた。“共感性”は“社会化”(. 41)、“共感的関心”(. 66)、“気持ちの想像”(. 49) と正の相関がみられた。

多次元的道德性尺度の信頼性の検討

1 回目と 2 回目の下位尺度ごとの相関係数を算出し、信頼性の検討を行った。その結果、“人間性”は. 92, “自律性”は. 73, “法の順守”は. 85, “共感性”は. 92 であった。

考 察

多次元的道德性尺度は、1 回目と 2 回目の調査の相関が非常に高く、また下位尺度それぞれの α 係数も高かったため、高い信頼性があると言える。

多次元的道德性尺度の下位尺度である“人間性”は“共感的関心”、“気持ちの想像”と関連がみられた。“自律性”は“個人的苦痛”、“自己決定”、“独立”と関連がみられた。“法の順守”は“メタルール関連”と関連がみられた。“共感性”は“社会化”、“共感的関心”、“気持ちの想像”と関連がみられた。したがって、多次元的道德性尺度は、ある程度の構成概念妥当性があると言える。

以上のことから道德性は少なくとも、“人間性”、“自律性”、“法の順守”、“共感性”の 4 つの下位概念から構成されていることが明らかとなった。Hogan (1973) によれば、道德性は道德的知識、社会化、共感性、責務と良心の倫理、自律性から構成されているとしており、社会化を“人間性”、共感性を“共感性”、責務と良心の倫理を“法の順守”と対応させることができる。さらに Hogan の道德的知識も、多次元的道德性尺度の作成の際に選択式の質問紙では測定できないとして含めなかった“‘道德’を知る”であると対応させることができるため、本研究と理論的に一致すると言える。

引用文献

安藤史高（2003）. 自律性欲求とクリティカルシンキング志向性との関連 人間環境大学紀要, 2, 51-59.

広田信一（2010）. 根源となる社会的ルール観に関する検討 山形大学紀要, 15, 85-93.

Hogan, R. (1973). Moral conduct and moral character: A psychological perspective. *Psychological Bulletin*, 79, 217-232.

川喜田二郎（1967）. 発想法 中央公論社

菊池章夫（1988）. 思いやりを科学する——向社会的行動の心理とスキル 川島書店

櫻井郁夫（2011）. Defining Issues Test を用いた道德判断発達分析 教育心理学研究, 59, 155-167.

登張真穂（2003）. 青年期の共感性の発達: 多次元的視点による検討 発達心理学研究, 14, 136-148.

山岸明子（1980）. 青年期における道德判断の発達測定のための質問紙の作成とその検討 心理学研究, 51, 92-95.